

あがまち 田野浦の歴史

田野浦提灯山

1 なるたきじぞう ちやうしゆうじん やあとち 鳴瀧地蔵・長州陣屋跡地

幕末(1863年)長州藩騎兵隊が田野浦を強制占拠し、鳴竹に陣屋を築いた。小倉藩は、目明しの櫛屋宅次郎に治安維持を行かせた。だが、奇兵隊により殺され、海に投げ捨てられた。後に地元有志が宅次郎の霊をまつり、地蔵を置いた。

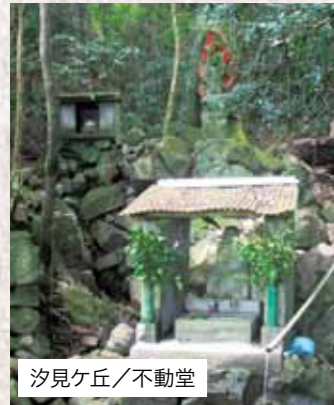


2 たのうらしんしこくはちじゆうはっかしよ 田野浦新四国八十八ヶ所

以前、田野浦の山中には田野浦新四国八十八ヶ所の霊場があった。現在残されている汐見ヶ丘には「不動堂」があり、毎年10月28日に大祭が行われている。不動堂から少し登り、白野江に行く峠に「生目八幡」がある。これは、「日向の眼の神様」として眼病にご利益があるとされる。宮崎県の「生目神社」から田野浦に分霊されたもの。今は古びたお社が残っている。昭和62年頃、各霊場の弘法大師像を金迫の「薬師堂」と大蔵院境内に集約し祀られた。「薬師堂」の催事に合わせて毎月8日13時より勤行が行われている。



金迫/薬師堂



汐見ヶ丘/不動堂

3 だいぞういん 大蔵院

〈首つぎ大師(弘法大師)〉山の石段のそばに首をつないだ50数体の大師石像がすえられている。これは奇兵隊により首を打ち落とされ、下関彦島の金毘羅の薬師堂に放置されたものを田野浦の信者が持ち帰り修復後、墓の山にまつた。



〈長崎丸招魂碑〉1863年、長州藩が下関前田砲台から薩摩藩船長崎丸を外国船と間違え砲撃し、炎上沈没。28名が亡くなった。後に薩摩藩が前田砲台を望む高輝山(通称墓の山)に慰霊碑を建立。大蔵院は1953年に真言宗寺院として建立された。

4 たのうらしょうがっこう 田野浦小学校とユーカリ

田野浦小学校は、1872年(明治5年)小笠原藩別邸に校舎が建てられ開校し、1912年(明治45年)現在の場所に移設。その際、記念として2本のユーカリが植樹された。校舎増設に伴い1本は伐採されたが、1本はシンボルとしてそびえ、児童を見守っている。



5 そのべしや そのべじんじや 蘭辺社(蘭邊神社)

田野浦が港町として栄えていた1811年、猿田彦大神(さるたひこおおかみ)を祭神として建立。商売繁盛・交通安全などにご利益があるとされている。



6 しんらくじ 真楽寺

壇ノ浦の戦いに破れ、投身した平家の女官が田野浦の里人に助けられた。女官は尼僧(おびく)となり、聖山の登り松のそばに庵を造り平家一門の冥福を祈った。里人はおびく様の死後、その徳を偲び、聖山のふもとに寺を建立した。これが真楽寺と伝えられている(1200年頃)1866年の豊長戦争で焼失したが、後に再建された。元々は海側の石柱がある方が正面だった。



7 ひじりやまてんまんぐう てんじんじやだいみょうじん 聖山天満宮(天神社大明神)

太宰府に左遷された菅原道真が九州初上陸した場所に鳥居が建立されたと伝えられている。鳥居には1822年(文政5年)正月吉日 永文字 屋内真砂が寄進とある。昭和28年豪雨の土砂崩れにより、鳥居の半分が埋まった。



8 あわしまじんじや 淡島神社

大里・奥田の淡島神社の元社と伝えられている。女性の守り神として安産・子授け・万病平癒にご利益があるとされている。



9 かすがじんじや 春日神社

笠石山の石段を登りつめた所に社殿があったが老朽化と自然災害により倒壊、一部のみ残存している。1661年の創建とされるが、正面の鳥居は、1718年に建てられた。門司区の石造物では一番古いといわれている。



10 ばんしよ はな 番所の鼻

江戸時代、遠見の櫓(やぐら)を組み、海峡の船の往来、人や荷物の出入りを監視した場所である。番所の近くにお上がり場(船着場)があり、藩主が参勤交代や領内見回りの折、乗り降りした場所。



11 きふねじんじや ちからいし 貴布禰神社と力石

太刀浦海岸にまつられていたが、埋め立て工事のため、地域の人により現在の場所に移設された。1849年に地元から寄進された手水鉢と、長崎から住民が持ち帰った五個の力石が奉納されている。



12 たちいけいど 太刀の池(井戸)

源平合戦の折、平家の侍大将が血太刀をこの池で洗ったとの伝説がある。また、安徳天皇の御太刀を池に沈めて戦勝祈願をしたとも伝えられる。これが「太刀浦」の地名の由来ともなった。



13 ひじりやま 聖山

西暦200年頃、神巧(じんぐう)皇后(聖なる人)が三韓征伐の折、潮待ちする船団を山頂で指揮したという伝説がある。標高75mの小高い山、聖なる山としてふもとは多数の墓石がまつられている。



聖山山頂からの景色

14 すみよしじんじや 住吉神社

1838年、楠原(くすばる)村大久保から住吉大神を分霊して創建された。



田野浦提灯山は江戸時代末期、北前船の寄港地として繁栄を誇った。夜間の入港も多く、多くの廻船が船宿に合図する方法として、提灯を振りかざし揺らしていた。ゆらゆらと水面に映え、美しい光景だったという。その景色にちなんで提灯山が仕立てられたといわれている。

春日神社の祭日には、北・仲・南の各町内から3台の提灯山と神輿が巡航。当時の高さは26尺(約8m)であったが、14尺(約4.2m)に復元された。

現在は伝統芸能として地域行事に合わせ、有志と子どもたちにより、提灯山の引き回し巡航が行われている。